

Essay

ヤマザキマリ

ヴァイオリンのエネルギッシュで快活な音色は女性たちのおしゃべり。低音系の弦楽器は男性たちが交わす止まない論議。小鳥たちのさえずりや猫の鳴き声のような木管楽器に、天から響く神々の声のような金管楽器。コンサートが始まる前のステージは、まるでどこかおとぎの街の情景を見ているように賑やかだ。そうした彩りが豊かで饒舌な楽器の音色も、オーボエの「ラ」の音が響き出したとたん、一つにまとまる。その瞬間に漲る緊張感と、様々な楽器たちの一体感。何かが始まる前の前触れを囁き合うような音が重なりあって止み、コンダクターの出現とともに会場からは屋根を叩く雨音のような拍手の音。

幼い頃、オーケストラのヴィオラ奏者だった母に連れられて、コンサートホールの客席最前列の一番端のシートに座らされていた私と妹にとって、こうしたコンサート前のチューニングはその後会場内に繰り広げられる様々な物語のオーバチュアであり、私にとって大好きな時間でもあった。

早くに夫に先立たれ、シングルマザーのヴィオラ奏者として切り盛りしていた彼女にとって、月に何度かある演奏会の度に、幼い娘二人を家に残してばかりいるのはかなり心許なかったはずだ。だから時々、娘たちが聞いても飽きないような、そして母にとっても思い入れのあるような楽曲の演目がある演奏会には、私たち娘を会場まで連れて行って、客席に座らせることがあった。時には、メシアンやシベリウスのように、母にとっては素晴らしい曲であっても娘たちにはなかなかハードルが高い演目があると、私と妹はじっとシートに座っているのが耐えられなくなって、もぞもぞと芋虫のように動き出す。それぞれの楽章が終わっても観客の拍手が沸かないと「ああ、まだ終わりじゃなかったのか……」とがっかりした気持ちになって、足をぶらぶらしたり、シートからずり落ちてみたりと落ち着かない。すると突然ステージから鋭い視線の気配を感じ、そちらを見ればヴィオ

ラを演奏する母の視線の焦点が、指揮者の棒ではなく、私たち姉妹に対して向けられている。素晴らしき一体感をなしているこの楽曲が、コンダクターの棒を無視する母の失敗で台無しになったら大変だ、という焦りに私と妹は姿勢を正す。母の集中力を散漫にしないために、そういった難しい曲も、じっと最後まで聞かなければならないわけだが、それはなかなか子供には厳しい修練だった。でも、実は私はこの修練の最中に一つのスキルを身につけた。

「そうだ、この音楽から物語を想像しよう」

陰鬱な音色から夜の暗い森、フルートの奏でる旋律は月の光。遠くでこちらを見ている鹿の親子。突然奥の茂みから真っ黒な岩みたいなクマの影が近寄ってくる。当時暮らしていた北海道のそうした大自然のイメージを、様々な交響曲に重ねて頭に思い浮かべてみると、これがなかなか楽しいのだった。光と影、そして深い色合いで彩られたそうしたイメージを演出してくれるのは、チューニングの時にそれぞれ好き勝手なおしゃべりをしていた、楽器たちである。

こうした幼少期の経験は、間違いなく漫画という表現を生業としている今の私に、大きな影響を及ぼしたはずだ。実際、今でも漫画の全体的なイメージや展開を考える時に、音楽を聴くことが欠かせないのは、絵や物語と音楽が、私にとっては切り離せないからなのだろう。絵画が音楽を奏でることもあれば、音楽が絵画を描くこともある。音楽家の道には進まなかったけれど、ペンというツールを使って音楽を演奏しているような気持ちになることが、私には度々ある。

母がこのオーケストラに入団した1960年代当時はまだ女性が芸能という分野で活躍することは一般的ではなく、しかも自分と縁もゆかりもない北海道という土地で、ひとりで娘二人を育てながら音楽という職業を両立させるのは簡単な

ことではなかったはずだが、それでも私の記憶にある当時の母はいつでも気丈で前向きだった。とにかく音楽が大好きだったから、家族に大反対されようと何だろうと、ヴィオラ奏者という道に進んだ自らの選択に後ろめたさも後悔も無く、子育てとの両立も彼女を困惑させるには至っていなかった。我々姉妹をコンサートに連れていくという子育てスタイルもその後しばらく続き、必要があれば学校さえ休ませた。

「学校の勉強より、ずっとあなたたちのためになるから」というのが母の言い分だが、結局そんな独自の姿勢が後に私をわずか14歳で欧州を1ヶ月間ひとり旅させたり、17歳でイタリアに留学をさせる思い切りへと繋がっていく。

先述したような少し難しい近代音楽や現代音楽に私たち姉妹が動員されるのは稀で、ほとんどがどこかで聞いた覚えのあるようなオペラ、『ピーターと狼』のような子供向けの楽曲、そしてガーシュウィンやルロイ・アンダーソンなどモダンなアメリカの作曲家のもの、そしてバレエ組曲といったものである。特にロシア人作曲家たちのバレエ組曲は、大体コンサートホールで生演奏を聞かされてきたように思う。

毎年クリスマスの時期が近くなると『くるみ割り人形』は都市でも地方でも演奏される人気の演目だったが、私たち姉妹も様々な場所でこの演奏を聞いてきた。残念ながら、バレエと一緒にステージは今に至るまで一度も見ることがないのだが、もし踊りとセットになった状態のものを目にしていたら、逆に私の物語をイメージする想像力がそれほど旺盛に膨らむこともなかったかもしれない。

例えばボロディンの『イーゴリ公』の序曲「だったん人の踊り」も、演奏の機会がある度に母が私たちに聞かせた楽曲のひとつだが、予め母から聞いていた物語のあらすじや、中世時代のロシアの広大な土地、そしてそこに住まう人々の私

が独自に構築したイメージは、大人になってオペラとバレエが一緒になった舞台とは大きな違いがあった。もちろん舞台はすこぶる楽しかったのだけれど、やはり自分が勝手に想像した北方ロシアの景観は、払拭されることなく今も私の中に滞り続けている。

同様に『くるみ割り人形』も、今でも曲を聴き始めたとき、子供の時に読んだ絵本の情報と私が自分なりに盛り込んだ独特のロシアのクリスマスのイメージが、頭の中で好き勝手に練り広げられていく。

イタリアのフィレンツェで画学生として留学していた頃の彼氏は、コンセルヴァトリーオ（音楽院）に通いながら作曲を学ぶ学生兼詩人で、やはりロシアのロマン派の音楽が大好きだった。家の中の古ぼけたカセットデッキでよく聞いていた曲の一つがやはり『くるみ割り人形』だったが、この人は曲を聴きながら、どの楽器が今どんな風に演奏しているのか、指揮者の棒はどんな感じで振られているのかを、大袈裟な身ぶり手振りで楽しく語っていた。それはそれで私が幼少期から思い描いてきた独自の『くるみ割り人形』のイメージとも全然違ったが、クリスマスには家族で濃厚な時間を過ごすイタリア人らしい彼なりの世界観も面白かった。

私にとっての『くるみ割り人形』は、もちろん王政ロシア時代の華やかな子供の世界のイメージが圧倒的ではあるのだけれど、やはり子供の頃に客席から見ていたコンサートホールのステージを照らすオレンジ色の光や独特の性格を持った個性豊かな楽器たち、そして当時暮らしていた北国の、深い緑の針葉樹に静かに積もる夜の雪を踏みしめながら、楽器を抱えて帰ってくる母を「おかえりなさい」と家で迎える時の、あの大きな安堵と喜びをもたらす、幸せの楽曲なのである。

(やまざき まり・漫画家、随筆家)